

# 内村鑑三と星の観望

涌 井 隆

## 1

1918 年 10 月 10 日発行の自らが主宰する『聖書之研究』に内村鑑三は次のように書いた。

斯かる者を書き始めてみた、毎日二十六日より翌月二十五日に至るまでの余の生涯の日々の記録である、若し読者を益するならば之を続ける、益さないならば直ぐに廃める、試に二三回続けてみる。

このように始まった公開日記は結局彼が病に倒れるまで10年余り続いた。『聖書之研究』というのは自らが主宰編集する個人雑誌で、「日々の生涯」と題されたこの公開日記は一日は生涯に匹敵する重みを持っているという信念に基づいている。

最近では、毎日ブログを書いて公開している文筆家も多くなったが、内村鑑三はそのような営みを一世紀近く先取りしていたとも言えるかも知れない。学校で教えたり、『萬朝報』という日刊紙に執筆の場を求めたこともあったが、免職されたり、自ら進んで辞職したりしたので、言論人としての彼の最終的な拠り所は、英文の著作による世界的な名声と、その名声に惹かれて集まってくる聴衆への講演、さらに自分の雑誌に掲載する記事論文の執筆であった。日記を通読すると、今日のように光の速度で世界と繋がっているわけではないが、頻繁に世界中の読者と手紙を交換し、海外からの訪問客もまれではなかったことが分かる。今日では世界に読者を持つブロガーは珍しくないが、紙とインクと旅客船の時代に彼のような活動を行っていた言論人は少ないし、当時の日本では特異な存在だった。彼の日記は、日々の活動を要約しているだけでなく、自らの信仰と思想を雄弁に語り、時には愚痴もこぼし、『萬朝報』時代を髣髴させるような一刀両断的な政治談議を散りばめている。彼特有の情熱のほとばしりと、論理矛盾を辞さない勢いの筆致は晩年においても失われてはおらずきわめて興味深い。また時には皮肉をこめた、また時にはひょうきんなユーモアのセンスも健在だ。<sup>(1)</sup>

2

本論でこの日記を扱うのは、内村鑑三が晩年になって天文学に興味を持ち、アマチュアの機材を使って星の観望を行い、その感動を随所に記録しているからである。天文学についての記載は1919年から1920年の間に集中している。本論では幾つか興味深い文章を引用し、内村鑑三が天文学に惹かれていったのは何故か、どのような道具を使って何を見ていたのか、星の観望と言う行為を彼の仕事の中でどのように位置づければよいのか、などについて考察を加えてみたい。

内村鑑三の著作には自然科学についての言及が多く、彼の思想形成に自然科学が大きくかかわっていることは明白であるが、晩年になってからは青年期の自然科学自体への関心が大きく復活した観がある。特に天文学についての関心が強まったのは、当時その領域が次々と新たな発見を生み出し世間の脚光を浴びていたことと無関係ではない。彼は近代日本が生み出した言論人（作家、思想家、評論家、ジャーナリストなどを含む）の中で、まずキリスト教徒であることで異端であり、さらに自然科学者としての立脚点を持っていたという点で異端であった。小説家など文芸人が星空について語ったり描写したりする場合、汎神論的な宇宙を想定したり、神秘的な宇宙に癒される登場人物を登場させたりするのが、よく見られる傾向だが、内村鑑三の場合、宇宙の奥にキリスト教の絶対神を見た。それも肉眼で星空を眺めぼんやり空想にふけるのではなく、双眼鏡や望遠鏡という道具を使い、天文学について本を読み、観望している個々の天体について科学的事実を知ろうとした。自分が持っている機材が物足らなくなると、聖書研究会のネットワークを通じてプロの天文学者と接触し、大型望遠鏡を覗かせてもらったりした。

天文学に興味を示し始めた頃の記載を見てみよう。

1919年11月1日

曇、後雨降る、差したる事を為さず、丸善に行き動物学書二冊買い求む、基督再臨の信仰を懐くを得て聖書の意味が判明せし以来、多くの神学書を読む必要なきに至り、金と時間と精力との余裕を生じたれば、再び青年時代の科学熱を復興し、時々天然の研究に没頭し得るに至りしは感謝の極みである、聖書と天然、世に確かなる者は此の二つである、其他の哲学、神学、文学、是等は接触らない方が遙かに利益である。

1919年11月4日

近世天文学の進歩に実に驚くべき者がある、(中略)、神の力と愛とは無限であると云ふが、無限の何たる乎を実見する者は天文学者である、無限を語る者は神学者であって無限を見るものは天文学者である、羨むべきは実に普通人の見えざるところに宇宙の深遠を探る天文学者である。

1919年11月21日

重なる仕事は星学の復習であった、神学又は宗教哲学の研究より遥かに興味多く且つ有益である、科学は証明し得る確実なる事実である、神学や哲学の異説紛々たるとは全く趣を異にする、明白なる神の啓示と確実なる天然の事実、其他の事は学ぶの要なし、ブルース、バイシュラーグ、サバチエー等の許多の神学者等に今日まで心思を乱されし事を悔むざるを得ない。

上の三つの記載を読むと、科学的知見を有無を言わせない確実性を持った事実として理解していたということが分かる。特に天文学は無限の存在である神を感じさせるがゆえに心酔した。神が無限であるというのは曖昧な言い方であるし、137億光年という観測可能な地平が存在することから考えると宇宙が無限であるというのは正確ではないが、宇宙の深遠に神のような絶対的な存在を見るのは何も不思議ではない。今日においても一般的に科学者は神の存在については懐疑的な場合が多いが、神を信じている科学者も多いし、宇宙の壮大さを前にして戦慄しない人は少ないだろう。神学についての反感は諸説紛紛して決着がつかないという点に由来している。それは教義の違いをめぐって分裂を繰り返す既成の諸宗派に対して彼が根深く持っていた反感と基本的に同一である。そもそも、彼が神道の八万の神を捨ててキリスト教の絶対神を選んだのは、自伝である *How I became a christian* (『余は如何にして基督信徒となりし乎』) で書いているように、八万の神にいちいち個別にお祈りしていたのでは、体が幾つあっても足りないし、神々が多くなると各々の神の信者への要求に矛盾が生じてくるからだった。<sup>(2)</sup>

学生時代の内村鑑三は理数系の教科に秀でており、札幌農学校では自然科学諸科目・数学において、同級生であった新渡戸稲造、宮部金吾らをおさえて常に首席を維持する秀才であった。札幌農学校卒業直後に就いたのも北海道開拓使民事局勸業課漁鯊科勤務という科学技術系の仕事だった。加藤真澄は、内村がその頃にした調査報告書「札幌県鮑魚審殖取調復命書ならびに潜水器使用規定見込書植上申」を論じて、その前半は観察

記録に基づいたアワビの発生や生殖などの生態の解剖学的・生理学的論述であって彼の生涯の中で最も優れた科学研究のひとつであると述べている (p.131)。彼が漁業を専門に選んだのは子供の頃魚釣りに親しみ魚に興味を持っていたからだが、漁業を産業として成り立たせるものは、水産物の科学的理解であるという信念を持っていた。これは札幌農学校の初代学長であったクラーク (W.S. Clark) の信念であった「科学的農業の確立」と通底するものであった。

このような科学的態度は彼の信仰告白記である *How I became a Christian: Out of my Diary* (『余は如何にして基督信徒となりし乎』) を貫いている。一般的に宗教と科学は別の領域に属し、お互い干渉しないという暗黙の了解が成立しているが、内村の場合、自分の信仰を科学的に説明するというのではなく、それを科学的分析の材料として提供しようとしているという意味で、科学に対する強い信念が感じられる。同著の緒言の冒頭に彼は、“I propose to write how I became a christian and not why.” (「余が書こうとするのは、余は如何にして基督信徒となりし乎である、何故にではない。」) と書いているが、これこそ科学的態度の宣言である。天文学に則して言えば、天文学者は宇宙が如何にあるかについての記述は行うが、何故宇宙が存在するかという問題については口を出さない。口を出した途端に科学者でなくなってしまうからだ。内村は自らの信仰の存在の神秘さを認めつつも、それを否定できない事実として受け止めていたから、純粹に客観的事実として科学者の分析に供するためにその自伝を書いた。緒言では、次のようにも書いている。

I might just as well call it a “biologist’s sketch-book,” in which is kept the accounts of all the morphological and physiological changes of a soul in its embryological developmet from a seed to a full-eared corn. (全集第3巻5頁)

余は同様にそれを『生物学者のスケッチ・ブック』とよんでもよい、その中には種子から穂にみちる穀物になるまでに胎生学的に発達した一つの靈魂の一部分が今や公衆に示されるのである。(日本語訳は岩波文庫版鈴木俊郎訳による。)

さて、内村鑑三の晩年に戻ろう。彼が天文学に興味を持ち始めたころは、今日と比べて、アマチュアとプロの間の差はそれほど大きくなかった。原子の構造の解明はまだ本格的に始まったばかりだったし、エドウィン・ハッブルがウィルソン天文台で働き始めたのは1919年だったので宇宙の全体像の究明もまだ始まったばかりだった。今日では、可視光線だけでなく電磁波のすべての波長で天体を観測しているが、当時は、アマチュアが自分で反射鏡を磨き、その延長で天文学を専攻してしまうというのも珍しくなっ

た。例えば、内村は1920年6月9日に山崎正光という米国カリフォルニア在住の学生の手紙を引用紹介している。彼は内村の感化を受けたクリスチャンで、聖書の中の星についての記述から天文学に興味を持ち、アマチュア熱が嵩じて大学で天文学を専攻するようになった。実際望遠鏡も製作している。下に、抜粋引用してみよう。今日とはかなり事情が異なっているのが分かる。

1920年6月9日

(前略) 二時の望遠鏡を手に入れたのが1908年でありました。それから多くの天文の書を手に入れ、又リツク天文台にも知人が出来て天文の研究を始めたのであります。二吋位の望遠鏡では小さ過ぎるので、自分で八吋の反射望遠鏡を製造しました。1910年には1ケ年間リツクの知人の世話になり、素人として研究を進めつつありました。然し研究すればする程面白くもなり、又自己の知識の不足を感じるので遂に大学に入って専門的に天文科を研究して居ります。

内村は自分達の仲間から彼のような本物の天文学者が現れてきたことを歓迎している。アマチュアの星の観望には道具が必要だが、内村鑑三の場合最初に手に入れたのは双眼鏡だった。

1919年12月1日

友人より思掛けなき寄付ありたれば市中に行き天文書二冊と双眼鏡一個を買い求めた、日暮るるや否や直に天を覗き、先ず第一にライラ（天琴）星座のヴィガを覗きしに其側に五等星位の連星（バイナリー）あるを認め非常に嬉しかった、是れ有名なるライラエプシロン号にして連星の各自がまた連星であるが故に実は複連星であるとの事である、是れ余自身に取りては連星の初めての発見であって言い尽くされぬ歓喜であった。

ライラというのは琴座の英語読みで、ヴィガはその主星である Vega（ヴェガ、七夕伝説の織姫星）のことである。琴座のエプシロン星は手で持てる小型双眼鏡でも二重星であることが分かるがそれぞれがまたさらに二重星であることは望遠鏡を使ってより高い倍率をかけないとわからない（このような美しい二重星はアマチュアの間ではダブルダブルと呼ばれており、琴座エプシロン星やさそり座ニュー星などが有名。）ただ、星座の形と位置を頭に入れる必要がある初心者にとっては広視野が得られる双眼鏡が入門用

としてもっとも適している。内村は、その後、プロの天文学者との交流を経て、大口径の望遠鏡を覗く機会を得るが、自分の望遠鏡を手に入れることを熱望していたようだ。

1920年2月3日

久振りにて銀座へ行った、書店を漁りしも買ひたい本とはなかった、、、(中略)、、、今欲しい者は星を覗くための善き望遠鏡である、今日之を索ねしも得ず其購求を眼鏡屋に託して帰った。

その後、実際望遠鏡を手に入れ高倍率をかけて二重星を観望したというような記述が見当たらないのでおそらく購入にまでは至らなかったのだろうと推測される。天文学に関する記載を通読するとその多くが星座の中での惑星の位置や惑星と恒星あるいは惑星と惑星の接近など肉眼でも観測できる現象に限られている。

1920年3月には自分の聖書研究会の仲間で星に興味を持っている人々を集めて星友会という天文同好会のようなものを立ち上げたいと模索している。

1920年3月3日

曇 山榊船長、馬來半島、爪哇、セルベス等沿岸の周航より帰り色々と面白い話が合った、彼は殊に赤道以南の空に輝く空に輝く星の壮美を語って得意であった、今や仲間の内に星道楽が殖え来りたれば我等の間に政友会ならで星友会の設立が計画されつつある、地上の権利を争ふ政友会は卑しむべしとするも天上の美を窺ふ星友会は尊ぶべしである、総ての事が愈々面白くなってきた。

しばらくして、プロの天文学者とも交流している。

1920年3月17日

曇 午後芝飯倉に東京天文台を訪ふた、数箇の望遠鏡並に精巧なる新式の分光器を見せて貰ひ非常に有益であった、後に事務室に於いて平山清次博士並に井上四郎君と宗教と天文との関係に就いて心置きない談話を交え誠に愉快であった、此世離れたる事に於いて宗教と天文とは能く似ている、其の点に於いて所謂宗教家、即ち教界の名士等は到底天文学者に及ばない、天文学は人類最高の

学問であって同時に亦最大の快樂である。

今日においてもアマチュアで分光器を持っている人は少ない。星の組成や地球に対する動きと距離を知るためには不可欠なものだが、精密な測定に耐えるものは高価でアマチュアが持っていては意味がない。アマチュアがプロと共同で研究プロジェクトに参加する場合でも、アマチュアの機材で貢献できる分野でのみ参加するのが普通である。

内村鑑三は星の観望を「星を覗く」と表現している。幾度も出てくるが、初出は次の記述である。

1919年12月9日

静かなる良き一日であった、引き続きレビ記と星学の研究的復習に興味津々たる者があつた、学んで而して之を習ふ亦楽しからずやである。夜に至り雲晴れ、冬の星覗き莊嚴言語に絶せりであった。

内村鑑三は金銭について複雑な感情を持っていたが、星を富の象徴であるダイヤモンドと比べている興味深い記載がある。『萬朝報』時代に金の亡者と成り果てた権力者を俎上に上げ笑いものにした彼は、生涯、財力と権力の濫用について批判的であり続けた。確かに、双眼鏡さえあれば、天上の富は万人に平等に与えられている（最近では富んだ国の方が光害の弊害が大きいので、貧しきものこそ幸いである。）

1920年1月27日

朝五時に床を出て復た蠍座の星を覗いた、其ムータ号の水平線より遠く離れざる所に二重星として光を見た、茲に又何人にも損害を掛けずしてダイヤモンドを二箇拾つたと云ふ訳である、毎日宝石一箇づつを拾ふとは何たる幸福の事である乎、憐れむべきは双眼鏡一つで獲らるべき物を高価を払って求むる此の世の華美者共である。

1920年3月8日

（前略）双眼鏡を取り出した、天狼星の右の下の方を見た、其所にヌン号の三重星を捉まへた、遙か下の方をみた、デルタ号を見届け、、、（中略）、、、此の星



を上と下と左とを取巻くに十七八粒の真珠より成る頸飾を以ってするとは、大犬星座のデルタ号は星界の女王である、斯んな安価な愉樂はない、双眼鏡一箇で宝石玩弄をするのである、人生を楽しむに此の世の富者と成るの必要は少しもない。

このように双眼鏡で星を覗いて驚嘆していた内村鑑三であったが、もう少しのところで新星発見の名誉を授けられ天文学史に小さな足跡を残すところだった。

1920年8月24日

晴 白鳥座の西北部、琴座とケフェウス座との間に新星が現はれた、立派なる二等星である、爆発が衝突に由て現はれしものであらう、多分今より五六十年前、余が生まれし頃に爆発せし星が大正九年の今日、其光線が此地球に達して新星として吾人の眼に映るのであらう。

1920年8月27日

曇 (中略) 東京天文台井上四郎氏の訪問を受けた、氏の談話に照らして見てこのたび白鳥座に現はれし新星発見者の名誉は僅少の注意で余に落ちたのであつた事が判明して残念であつた、此名誉には自分ながら与りたかつた、余は変な星だなど計り思ふて之を直ちに天文台に報告しなかつたのが余の怠慢であつた。何れにせよ「茲に大なる異象天に現はれ」たのである(黙示録十二章一節)、何も之を以て世界の終末、キリストの再臨の前兆と見做すのではない、無涯の宇宙に大異象の常に起こりつつあるを示すのである、一大世界が爆発して億々万里外に在る我等の眼にまで新星として映ずると云ふ事実を見るのである、この異象を見て彼得(ペテロ)後書第二章に「其の日には天に大なる響きありて去り体質尽く焚毀れ、地と其中にある物皆な焚尽きん」と記されあるも少しも怪しむに足りないのである、世界の焼尽は吾人が時々目撃する事実である、新星の出現と消滅が其である、大正九年八月二十一夜九時と十時の間に於て余は東京市外柏木今井館の前庭に於て白鳥座のアルファ号とガムマ号とを覗きつつありし間に天の此大異象を示されたのである。

この新星は **V476 Cygni** あるいは **Nova Cygni 1920** と呼ばれているもので今日でも観測可能であるが、17等の暗さなので60センチ級の望遠鏡がないと肉眼では見えない。新



星と言えば、1920年の時点では、超新星と新星の区別がなされていなかったのも、内村は自分が発見しそこなった新星出現を「ティコ・ブラーエの新星」（今日 SN1572 と呼ばれる超新星爆発）のようなものだと考えたかもしれない。超新星は星の進化の終末期に起こる星全体の爆発現象で、ひとつの銀河に数十年に一個の頻度で出現する。一方、新星は我々の天の川銀河においても毎年 10 個近く観測されている。超新星爆発は正に星全体の爆発なのでその後には星の姿をとどめず、塵が集まった星雲としてしか見えない。歴史的な超新星爆発として有名なのは、上記の SN1572 の他、藤原定家の『明月記』に記されている SN1054 などそれほど多くない。SN1054 は今日ではかに星雲（M1）という名の超新星残骸として知られている。新星と超新星爆発の絶対光度の差は後者が前者の 1 万倍以上あり、全く異なった天体現象である。新星は、変光の度合いと速度が通常の変光星より極端に大きいものとも考えることも出来る。

上の引用では新星という天文現象をキリストの再臨と直接には結び付けていないが、実は内村はキリスト再臨を信じていた。ちょうどその頃は、世界戦争を経てキリスト再臨の信仰を深めるようになった彼が、反再臨主義者と論戦を戦わせていた時期にあたっており、日記にも頻繁にキリスト再臨への言及がある。では、何ゆえ彼は自分の再臨説を補強するためにこの「新星発見」を積極的に使わなかったのだろうか。それはおそらく、永遠に決着がつかない不毛な神学論争にかかわるより、観察できる確固とした事実を相手にしている科学者としての自分を数十年ぶりに取り戻し、その世界に留まることを選んだからではないだろうか。キリスト再臨については今日 21 世紀になっても決着がついていないが、新星と超新星爆発が異なる現象であることは 1930 年代に明らかにされている。科学の世界においても論争は始終起こっているが、データの蓄積と理論構築の過程によって大概決着を見る。内村が、敢えて、自分の再臨説を持ち出さなかったのは、素人天文学者としてただ事実を指摘するだけに留めたかったのだろう。地球という惑星では世界戦争が起こり物価が乱高下し、世論は世紀末思想で満たされているかもしれないが、太陽が **Nova Cygni 1920** のように急激に光度を上げれば、地球なんて飲み込まれて一巻の終わりだよと言いたかったのかもしれない。

星之友会では当時の最先端の理論も紹介されたようだ。

1921 年 2 月 18 日

晴 引き続き静かなる日であった、夜の星之友会に於いて螺旋形星雲の説明を聞いた、是等は多分宇宙以外の宇宙ならんとの事である、而して今日までの観

測の結果に依れば斯かる宇宙は少なくとも三十万個以上あるならんとの事である、少なくとも十二億の太陽より成る此宇宙以外に更に又三十万以上の宇宙があると云ふ、大又大である、「我れ爾の指の業なる天を觀、爾の設け給へる月と星とを視るに、人は如何なるものなれば之を聖念に留め給ふや、人の子は如何なるものなれば之を顧み給ふや」である、講演終へて後に屋外に出れば、早春の空晴れ、梅の蕾は未だ堅くあるに、春の星なる獅子座の諸星は東天高く現はれ、木星と土星との其西南部に宿るを見た。

天文学史をひも解くと、1912年頃に V.M.Slipper が系外銀河のスペクトルに赤方偏移を発見し、1931年に Hubble と Humason が速度と距離が正比例するという宇宙膨張の理論を確立したので、内村が星の觀望に熱中していた頃は、その大発見が行われている真っ最中であった。

1921年6月27日には、星の觀望で目を悪くしたと書いている。

昨年は星を覗いて眼を傷めれば今年は地を踏んで健康を回復しやうと思ふ、而して天然は宗教と異なり之に、「神学者の憎惡」odium theologicumの伴ふなければ、心を休め気を養う上において其实益宏大無辺である、感謝す青年時代に友とせし天然が老年に至りて余の最善の慰者として在ることを。

夜星を觀望することが眼を傷めることになるというのは理解しがたいが、考えられるのは、双眼鏡の光軸が合っていなかったとか、左右の光軸が平行でなかったとかという可能性である。いづれにせよ、この記載以降星の觀望記録は加速的に少なくなっていく。さらに、ここでも上に論じた、若い頃の自然科学者であった自分への回帰が読み取れる。年を取るにつれ、同じ基督者が些細な教義の違いでいがみ合うことに疲れてきたということか。

### 3

内村の日記は、アマチュア天文家ならすなおに共感してしまう觀望記録に満ちている。本論を締めくくるに当たってその幾つかを引用してみたい。

1919 年 12 月 26 日

(前略) 星は鯨座の主なる者を見定めた、今や有名なる奇跡星オミクロン号は肉眼を以て見る事が出来ない。

有名な脈動変光星である鯨座のミラのことである。一年ほどの周期で 2 等から 11 等の間を行ったり来たりする。

1920 年 8 月 6 日

半晴 暴風去って後に空天は透通る計りに晴れ、蠍座と射手座の間に星団M第六号と七号在り在りと現れ、之を覗いて良暫く宇宙的感想に耽った、茲に我が書齋の窓より我宇宙以外の宇宙を覗くのである、彼処に幾千万と云ふ太陽が別に組織を成して別宇宙を構成して居るのである、彼処にも亦生命があるであらう、人間が居るであらう、然し必しも涙と失望があるとは限らない、何れにせよ此地球ばかりが神の造り給ひし世界ではない、「我が父の家には第宅(すまひ)多し」とイエスは曰ひ給ふた、若し此宇宙が悪くなれば他にもまだ宇宙が幾個でもある、蠍座の一座に於いてすら双眼鏡を以て覗き得る星団が八個ある、即ち天の一局部に於てすら宇宙が八個あるのである、而して「万物(全宇宙)は汝等の有(もの)なり」とあれば、是等宇宙外の宇宙も亦我有と見て可いのである、然らば歎き悲しむの必要は何もない、晩夏の空天に銀河將に鮮やかならんとする頃、許多の星群は星雲星団と共に神の子供の無限の希望を語るのである。

蠍座と射手座の方向は天の川銀河の中心にあたり、単に恒星が密集しているだけでなく、若い星が大量に造られる場である発光星雲も多い。しかし、上に引いた内村の観望ではM6とM7という散開星団にしか言及していないので、手持ちで使える比較的小さい口径の双眼鏡を使っていたのだということが判る。ただ、東京の郊外とは言え、1920年にはまだ光害が少なく地平線近くでも空が暗かったというのはうらやましい。地球外生命の可能性については、全くその通りで、神が全宇宙を創ったとするなら、地球だけを特別扱いしなかっただろうとは容易に推測できる。最後に、射手座の反対側の北の天の川にも触れている文章があるので引く。

1920 年 11 月 3 日

曇 昨夜空晴れ、双眼鏡を以てペルセウス座を覗き荘観であつた、主星アルゲニブを取巻く星の花綵、それとカシオピア座との間に振撒かれたる星の金砂、譬ふるに物なしである、今日又心を静にして単へに健康回復の途を計った。

「カシオピア座との間に振撒かれたる星の金砂」というのは、有名な二重星団で、北半球から小型双眼鏡で眺めて最も見栄えがする天体であると断定してもおそらく異議を唱える人は少ないだろう。筆者も山の上で何人もの人に自分の 20 × 77mm の双眼鏡で覗かせてあげたことがあるが、皆一様に感嘆の声を上げた。

#### 4

本論では、内村鑑三の日記の天文学についての記載が集中している 1920 年から 1921 年を扱った。いわゆる「不敬事件」に始まり、日露戦争反対、不戦論、再臨論と内村は、常に論争の中心になり、世論を敵にし、その度に友人も出来たが、敵も作った。自身の聖書研究会を運営して行く過程で、経営危機や信頼した弟子の背信、離教、など対人関係の軋轢も幾度となく経験した。無教会主義を標榜していても、自らが講演すれば毎回 500 人以上も会費を払って聴きに來るほどの組織を運営している以上、その組織を誰に引き継ぐかという問題も無視できなかった。1921 年 6 月 27 日に *odium theologicum* という言葉で表現しているのは、決着がつかない不毛な論争とそれが引き起こす対人関係の軋轢から自由になりたいという気持ちである。幸い、内村は自然科学という若い頃の自分の専門に戻ればよかった。自然科学は事実を扱い、論争は客観的な形で決着を見るからである。天文学は晩年になって初めて基礎を勉強しはじめた分野であるが、観察を基本とする点で彼の専門とした水産学や動植物学と何ら異なるところはない。天文学は、対象物が広大であるが故に、それを観察（観望）する内村に、万物の創造主である神を身近に感じさせた。

天文学は、我々はどこから来て、どこに行くのか、いかにして存在するものは存在するようになったのか、というような誰もが子供の頃から疑問に持っている大問題に科学的に答えようとする学問である。今日においては自然科学は高度に専門細分化されているが、天文学は扱う対象が存在全体であるが故に、最も「哲学的」な含意を持っている科学であるといえるかもしれない。今日のいわゆる哲学は観察を行わず、数学にも頼らないで神学論争を続けているだけなので、そのような素朴ではあるが根源的な疑問からど

んどん遠ざかっている。哲学が神を扱わなくなって久しいが、天文学は神について考えさせることを止めない。内村鑑三が晩年に天文学に強い関心を持ったのは、彼の思想形成史の流れから言っても、彼の経歴を鑑みても、自然な成り行きであったと考えざるを得ない。

## 注

- (1) 例えば、次の記述には思わず笑ってしまう。

1921年2月3日

久振りにて基督教書類会社に行き、ダイスマン、ライトフット、フィリップス・ブルツクス、ジョン・ブラウン等の著書六冊を買って帰った、何れも貴き知識の宝庫である、少しづつ読んで講演と雑誌との価値を増さうと欲ふ。魚屋の前を通り鯨、コノシロ等の列べあるを見て魚類学熱が勃然として起こつた、星を覗くことが出来なくなりし今日、再びアルベルト・グンテルの著書を手にして魚類研究を始めなくなつた、健康回復の徴であらう。

- (2) *How I became a christian* には次の記載がある。“Multiplicity of gods often involved the contradiction of the requirements of one god with those of another, and sad was the plight of a conscientious soul when he had to satisfy more than one god. With so many gods to satisfy and appease, I was naturally a fretful timid child. I framed a general prayer to be offerred to every one of them, adding of course special requests appropriate to each, as I happened to pass before each temple.....The number of deities to be worshipped increased day by day, till I found my little soul totally incapable of pleasing them all. But a relief came at last.” (『全集』 第3巻 11 - 12 頁)

「神々が多種多様なことはしばしば甲の神の要求と乙の神の要求との矛盾をもたらした、そして悲愴なのは甲の神をも乙の神をも満足させなければならないときの良心的な者の苦境であった。かように多数の満足させ宥むべき神があつて、余は自然に気むずかしい物おじする子供であった。余は如何なる神にも捧げられる一般的な祈りを考え出した、それぞれの神社の前をたまたま通り過ぎる時にはそれぞれそれに適する特別の祈願をつけ加えるのはもちろんである、拝すべき神の数は日に日に増加して、ついには余の小さな靈魂はそれらすべての神々の意を満たすことの全然不可能なことがわかった。しかし、救いはついに来たのである。」(鈴木俊郎訳)

## 参考文献

- 安藝基雄 『晩年の内村鑑三』 岩波書店 1997
- 太田雄三 『内村鑑三：その世界主義と日本主義をめぐって』 研究社出版 1977
- 小原信 『内村鑑三の生涯：近代日本とキリスト教の光源を見つめて』 PHP 研究所
- 影山昇 『内村鑑三と寺田寅彦一海に生きたふたり』 くもん出版 1990
- 加藤真澄 「内村鑑三における科学とキリスト教—札幌農学校入学から米国留学まで」『科学史研究』Ⅱ, 36 (1997)
- 内村鑑三 『内村鑑三全集』 岩波書店 1983
- 内村鑑三 『余は如何にして基督信徒となりし乎』 岩波文庫 1977
- 政池仁 『内村鑑三伝』 再増補改定新版 教文館 1977
- 『丸善 宇宙・天文大辞典』 丸善株式会社 1987
- 日本アマチュア天文史編纂会編 『改訂版日本アマチュア天文史』 恒星社厚生閣 1995
- 日本アマチュア天文史編纂会編 『続日本アマチュア天文史』 恒星社厚生閣 1994
- 『天文年鑑』2006年版 誠文堂新光社
- <http://en.wikipedia.org/wiki/Nova>
- <http://homepage3.nifty.com/silver-moon/teika/teika-e.htm>